

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年十一月
瞳人 絵夢	蝸牛 ことは 光雲2	しーしー ひろ志	名負人 山菜	名負人 山菜		素風			きいち	たくみ	和永 佳月	月を	凡士		
帰り来る娘の笑みや白芙蓉 うん、よう帰ったね、の気持ちよし。季語が喜びと結びついている。	手締めする声をここに酉の市 酉の市の光景が見える。酉の市の賑わいが伝わってきます。	潮溜まり細波立ちて初時雨 雨が降り出すようすを上手く水溜まりで表現しています。	秋晴れや思ひの丈舞へ女宰相 ブルースと冬の滝の組み合わせがなんとも俳諧！	ブルースの魂が棲む冬の滝 ブルースと冬の滝の組み合わせがなんとも俳諧！	舌の根を蕩かし熟柿甘きこと 舌の根をとるかすという諧謔に降参！	菜漬く夜の妻の話の埒も無し 「妻の話の埒も無し」が良い。	人生の恥部を隠せる落葉かな	ワルキューレ鴉が群れる枯れ櫓	大好きな父さんの肩流れ星 大好きな父さんと流れ星の取り合せ文句なし。	点滴に繋がれ拝む初日かな 全快できますように。	目覚めれば厨に音なく初時雨 寂しいですね。奥様がおられないことに気づくのですね。	澄みわたり余白の増へし冬はじめ 中七の「余白」の把握が嬉しかったです。	木通の実熟れ切腹をしてをりし アケビのことか？。	バス停や立冬の風髪ゆらす	
高松和永	松田素風	春駒	瞳人	新井のり子	ひろ志	安田蝸牛	森佳月	しーしー	檜鼻ことは	宇田靖之	つぶ金	展平	衛	米山カロー リング	

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年十一月
順一		幹子		楽	蝸牛 総太郎	のり子 展乎 ことは 鶴城	山菜 梗舟		くるみ	のり子 米山 六弦	龍野 展乎 かれん 音思	霜里	名負人 鶴城 土璃 しんい かれん 春駒 霜里		
憂国忌なげに若者楯突かぬ 三島忌と言う季語を活かした詠み方だと思いました。	コーヒーの二杯目秋の夜長かな	子には子の暮らしが有るからと、こどもさんに対する愛情を感じました。同時にまだまだお元気な方と思いました。 子の世話になるはまだ先大根干す	古日記紅葉挟んだページあり	落日や案山子は長き尾を引きて 案山子の影に着目したところがいいと思いました。	光芒の洩れて時雨の止みにけり 「光芒の洩れて」が効いている。	石段の一段飛ばし七五三 「幼子の成長を見守る視線を感じる。子供たちの元気な様子が浮かぶ。石段の一段飛ばし」という描写が巧みです。	小春日和や婆婆が車掌の縄電車 小春日の長閑さをうまく捉えた。運転手はお孫さんですね。	歩き食ふ肉まん熱し山眠る 小春日の長閑さをうまく捉えた。運転手はお孫さんですね。	柿簾日の斑の中に猫の影 カメラアイのような句、ステキです！！	小春日や頷くだけの父のゐて 亡き父に逢いたくなる一句。ほのぼのとした所が良い。小春日なのに何故か切ない。	落葉追ふ風の行方を知らずして 確かに、風はどこに行くんだろう？落葉が風に吹かれていく様子が見える。	大江戸線六本木駅冬の蝶 意外な光景。どこから来てどこから出るのかしら。	警官も板前もゐて夜学の灯 ひとっだけポツンと点る教室の灯り。そこで熱心に学ぶさまざまな恰好をした大人が目につかぶ。人生いろいろ。夜学生にはいろいろな職業の人がいる。微笑ましく、健気で、ちよつと寂しいような光景です。夜学は秋の季語、勉学の秋にふさわしい管と鑑賞。	実柘榴は裂けて哀しや闇を噛む	
青木 鶴城	衛	荒一葉	和田イチ子	立野音思	破れ蓮	石関六弦	新 曆文	秋谷風舎	岩清水彩香	わがん	しんい	神谷たくみ	河野凡士	光雲2	

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年十一月
		総太郎 癒香			くるみ 霜里	和永 わがん 佳月 つぶ金		楽 鶴城 彩香 一葉 わがん 音思 癒香	ひろ志		総太郎		光雲2		
神送とか神迎とかワンチャン	紅葉狩茶店のひとに会ひたくて	幼子のもろ手かじかみ冬兆す 思わず幼子の手を包んであげたくなる句。	善男善女の列へぐつぐつ味噌おでん	老け顔の驚き耳に秋暮るる	冬の日のなかへ釣り糸垂れてをり 所在なきひと日「冬の日のなかへ」の表現に惹かれました。水面に映る陽も釣瓶落とし。	落とす葉を落として木立静かなり 邪念を捨て心静かですか。シンプルさが好きです。季語は落葉か冬木立のいずれだろう。	梵鐘のとよもす沖やいさざ舟	晩鐘の長き余韻や枇杷の花 季語の取り合わせがいいと思いました。言葉の選択が互いに引き合い映像と音響、香りまで漂う。ありそうな景であるが枇杷の花に希望が見える。夕暮れの景が鮮やか。鐘の音、枇杷の色、香まで感じます。とても静かな日の夕方、気温が急に下がり寒さを感じる中での晩鐘、心に響くものがありますね。寒い時期に咲く枇杷の花が晩鐘とマツチしている。	裏庭の闇深々と虫時雨	秋の夜 思ひを風に 声遠し	愛とぎれ終電までの冬屋台	鼻赤く那須七湯はみぞれかな	ふつと息吐き冬天の街をゆく	女子鷹匠のマリッジリング運ぶ鷹	
網野月を	平野 楽	寒立馬	森下山菜	高原ひろし	総太郎	霜里	大越マーガレット	くるみ	龍野ひろし	渡邊清隆	峰岡名負人	渋谷きいち	かれん	小林土璃	

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年十一月
破れ蓮	癒香	佳月	展平 きいち	蝸牛 風子 梗舟 喜夫	喜夫	米山			凡士	絵夢 きいち	しんい しーしー				
<p>築地松てふ風垣の有る旧家</p> <p>出雲地方の屋敷林の様子が目に浮かぶ。</p>	<p>湯の花の湯口に白し山眠る</p> <p>湯の花の白と雪山の白を連想させる。</p>	<p>影踏んで止めてみました木の葉髪</p>	<p>蓑虫や南京錠の掛かる蔵</p> <p>蓑虫と南京錠の取り合わせの妙。覗きたくなる蓑虫と蔵の中、取り合わせが良い。</p>	<p>音も色も消し去る山の雪景色</p> <p>雪景色を上手く詠んでいる。深深とした白一色の音のない世界。雪景色はそうですね。自然には勝てない、己の小ささを見つけたりかな。</p>	<p>名月やひとりぽっちを暴くよに</p> <p>名月の明るさに影一つ、冷たい月に眠狂四郎かな。</p>	<p>終電の過ぎし踏切冬はじめ</p> <p>切ない感じが出ています。</p>	<p>障子貼り任せうろうろ杞憂せり</p>	<p>寝るための炬燵の城はピンク色</p>	<p>蓑虫や今朝も声かけ元気かと</p> <p>わが庭にはとんと見かけなくなつたなあ！</p>	<p>秋燕朝夕二便の時刻表</p> <p>燕に託す地方の現状を上手く表現。帰る燕とたつた2本の時刻表、過疎村の淋しさが伝わる。</p>	<p>埋蔵金の赤城山麓からつ風</p> <p>埋蔵金はからつぽかも？季語の妙。埋蔵金とからつ風の対比にいいねを。</p>	<p>話の穂とどまり流る衣被</p>	<p>冬晴れや蒼天に映えし六甲山</p>	<p>風に舞ふ龍飛の判官雲隠れ</p>	持永喜夫
安田蝸牛	森 佳月	つぶ金	檜鼻ことは	宇田靖之	米山カロー リング	展平	衛	石川順一	佐藤幹子	岡崎梗舟	染谷正信	絵夢	癒香		

水明インターネット句会（選句・選評）																令和七年十一月												
75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61														
かれん 凡士	瞳人		和永	ことは 一葉 素風 しーしー 音思	絵夢	土璃 彩香 月を 順一	大越	破れ蓮		光雲2 破れ蓮	龍野 土璃 大越	幹子		梗舟 つぶ金														
クルトンの潤けるスープ冬うらら	温かそうなスープの感じが冬うららに合っている。おいしいそうなクルトンスープ。	山眠る汽笛一声フェリー発つ	それで、いいではないですか。	メモ欄は句会二つや古暦	侘しらに門脇つはの花明り	洗い場の土の匂ひや新牛蒡	つはの花は、楚々とした花です。	侘しらに門脇つはの花明り	透きとおる綿飴は、小春日の詩的表現として独創的と思う。祭か参拝か、子供の手が持つ綿飴にきらきら輝く秋の光が見えます。座五の「透きとほる」に綿飴の本質と小春日和の季節感を感じます。日の光に透き通る綿あめ。観察眼の効いた句だと思いました。	綿飴の小春日和に透きとほる	月並み、凡句でも句作は自分のために！	荏苒や句歴を聞かれ鴟の黙	季節の息づかいと、農の暮らしの豊かさが伝わってきます。いかにも新牛蒡の香りが伝わってくる。季語が利いている。土の付いた牛蒡の匂いがします。	洗い場の土の匂ひや新牛蒡	象には何故か孤独を感じます。	冬林檎啜へて孤独象の鼻	夜風鳴り雨戸をたたく木の実かな	騒ぐ風に落ちる木の実を上手く表現している。	秋桜や薄紅の風わたりをり	庭園の冬囲いの様子が見える。	林泉の松に菰巻く冬構	緋めだかの底に動かず水の秋	秋の水の透明感をうまく表現している。うちのメダカもそうなんですそれを句にされるところが凄い。	ほろ酔ひのコートをひらり奴消へり	とてもかけがない奴だつたんですね。味わい深い句です。	移築した古民家の梁すす払い	銀輪の風にもカサと散り紅葉	カサとが良い。銀輪の風が好きです。
岩清水彩香	新 曆 文	秋谷風舎	しんい	わがん	光雲2	神谷たくみ	河野凡士	春駒	高松和永	松田素風	ひろ志	瞳人	新井のり子	しーしー														

水明インターネット句会（選句・選評）																														令和七年十一月			
90		89		88		87		86		85		84		83		82		81		80		79		78		77		76					
				暦文 ひろ志						瞳人				龍野 しんい つぶ金		のり子 暦文 風子 六弦 たくみ		わがん				一葉 素風		くるみ				喜夫					
こだわりの柚子湯に使う柚子の数		木の葉舞ふ公園チェロのプレリユード		湯豆腐や子が出て行った夜の雨		何時もの老人二人で湯豆腐の夕食。ちよつとの諍いで寒空の中に子は出て行った、親は冷えた湯豆腐をまなこに考え込む。		黄落や旅行客にも市民にも		秋深し つのる思いは 届かぬか		凧やもらひし子猫ふところに		萩の木の強き剪定村小春		どつと来る風のいたづら落葉搔風 風のいたづらがいい。どつと来るに同感。		領いて聞いてやるだけ林檎剥く		冬めくや作務衣忙しき庫裡の朝 忙しく、かつ静かに立ち働く僧の姿が目には浮かびます。		木通の実熟れ切腹をしておりし		凧の研ぎ澄ましたる月の影 「月の影」と詠んだことで凧吹く冬の夜空を描き切れている。「研ぎ澄ましたる」の措辞が良い。		鰯曇西へ西へと一万歩 大群の鰯雲だったのでしょう。		思ひ出のあの日この日や帰り花		年の瀬や何時ものカフェに「イン・マイ・ライフ		人生、過去は過去、今を悠々自適に軽く生きたいインマイライフ良いですね。	
くるみ		大越マーガレット		峰岡名負人		龍野ひろし		渡邊清隆		小林土璃		渋谷きいち		かれん		荒一葉		青木鶴城		衛		破れ蓮		和田イチ子		立野音思		石関六弦					

水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年十一月															
	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	
	楽 春駒		米山 風子 六弦	幹子		大越 彩香					春駒 順一		たくみ 月を		
	奥能登に花野となりし千枚田 <small>奥能登に思いを馳せます。地震で打撃を受けたのは町だけではなく、美しい千枚田が花野に悲しみを込めた秀句。</small>	毛皮着て甘味の汚れは茶色かな	豚汁を多めに作る文化の日 <small>取合せが愉快です。文化の日と豚汁の取り合わせが絶妙。町の文化祭でしょうか。</small>	夕潮に静かに揺れる牡蠣筏 <small>夕方の湾に広がる牡蠣筏の景が目には浮かびます。</small>	人攫ひ出さうな気配虎落笛	水縹の空と海抱き秋澄める <small>みなはだという言葉を初めて知りました綺麗です。伝統色の色彩に「空と海を抱く」の措辞が季語に響いてます。</small>	川刻む谷埋め尽くす紅葉かな	寒稽古息の凝りたる五稜郭	貰ひ柚子食べ買ひ柚子を浮かべけり	立冬や一病増えしやりきれなさ	天高し引き綱たぐり山車を出す <small>山車の入って居る高い倉庫。引き綱が手繰り寄せられて、山車が進発する。空が高い。</small>	熊鍋の途中子熊にミルク遣る	ハロウィーン転んでベソかく吸血鬼 <small>吸血鬼が際立ってます。何とも可愛らしい景です。</small>	ベランダに横日ゆらめく冬の朝	
	岡崎梗舟	石川順一	佐藤幹子	癒香	染谷正信	絵夢	平野 楽	持永喜夫	網野月を	高原ひろし	寒立馬	森下山菜	霜里	総太郎	